

そしてまた、ドーナツを

「——あー、兄弟、きよーだい？ そろそろ起きや、かおるはん？」

身体からだを揺ゆらされた気がして、オレはそつちに頭を向けた。

サングラスの向こうじゃ、ちいさな影が腰に手を当てて立ち上がってるよ。ちいさなフェレット——いや、タルト、タルヤんだね。

「ああ、寝ちやつてたかあ。悪いね、兄弟」

出てきた声も、ちよつとしわがれちやつてる。ありやあ、そんな疲れることしたっけねえ？

「なんや、氣い抜けたんか？」

まあしやあないか。ピーチはんで最後やつたもんなあ。みんなの結婚式は」

結婚？ ああ、そうか。そうだったっけ。

オレみたいのが、新婦側のお客さんでお呼ばれだ

からなあ。しかも4回も。そりや、いくらなんでも氣き疲れつかするかあ。でもさ、

「やれやれ、これでようやくひと段落だねえ——」

もともと、オレがこの四つ葉町に居ついたのは、あの嬢ちゃんたちに助けられたからなんだよなあ。

『幸せゲット』なんてさ、ちっちゃな身体で無む邪じや氣きに言ってくれる嬢ちゃんたち見てりや、少しは幸せな方に押してやらなきや、つて思うじゃない。それなりに色々やってきたオジサンおじさんの、そりやあ、ほんのちっちゃな夢ゆめつてやつさ。

だから、オレはここに居続けたんだ。

あつちこつちからの仕事の依頼を断つて、昔取った杵きねづか柄がらをいくつも振り回してね。そのうち、むかしのオレを知ってる連中がオレに協力してくれるようになって、いまじゃすっかり、ふしぎなオジサンだよ。

嬢ちゃんたちも、たまに魔法使い扱いするんだもんねえ。ふしぎって言ったら、プリキユア自分たちの方がよほどふしぎだ、ってのに。

ただのオジサンが無理もした、無奈もした。無謀なことだってした。それでもなんとか、『幸せゲット』にみんなたどり着けた、か。

「かなったかねえ、ちっちゃな夢は——」

「——まーた眠ってしもたんか、兄弟？ そろそろ、ふとんでちゃんと休まなあかんぞ？」

よく響く声ではつとしたら、またちっちゃな身体がオレを揺らしてたよ。ほんとに、疲れちまってたんだねえ、オレ。

「悪い悪い、兄弟」

タルやんの長いお腹を両手で支えて隅のテーブルへ。それからオレは、天井見上げながらひとつ深呼吸

吸した。

そうだねえ。これから、あのちっちゃな夢は、嬢ちゃんたち自身がかなえていくもんだし。オレの順番は、おしまいかねえ

「ちゃんと休まんと、またすぐ来てまうぞ？」

ん？

テーブルに顔を向けたら、タルやんがじつとオレのこと見つめてる。来てまう 来る、だって？

「一番早かったパッションはんとこ、赤さん産まれてんで。こないだ寄ったらとき会あつてきたけどな。首すわったら見せに行きたいわー、言つてたわ」

赤さん 赤ちゃんね。

そっか、次の世代、次の夢。ちっちゃな夢も、重ねてっいたら大きくなつちまうかあ

「いやあ。こりやまだまだ、疲れ足りないみたいだねえ。ぐはっ——」

「——るちゃん、かおるちゃん?」

んあ? なんか、まぶしい、ねえ。

「もう、かおるちゃん、って うわわっ!!」

かくん、と身体が倒れる感じで、思わずオレは何かにつかまっちまったよ。細くてやわらかいものうで?

「ちよっ、と、かおるちゃ 重、いっっ!」

おっとと。なんだ、ラブ嬢ちゃんの腕につかまっちやっただ。

「ああ、悪い悪い。ちよっと眠っちゃってたみたいだねえ」

腕から離れた手で頭をかきながら、オレはこっそり嬢ちゃんを眺めてみたんだよ。

きょう結婚したはずがない、中学生の嬢ちゃんをね。

「夢 か」

「へ? なんか言った?」

目の前で首をかしげてる中学生を見ながら、オレはそおつと息をはいてさ、

「いやいや、なんでもないないないのナイアガラ、ってね。滝のジュースと岩のドーナツで乾杯ってなもんさ。げはっ」

そのまま目の前にドーナツ置いて、高いところからジュースをコップに注いであげたんだよ。いつもの調子だね。

「ちよ、ちよっと、ジュースはねるって!」

とっさに車から離れた嬢ちゃん見ると、夢のなかの白いドレスが重なってくるね。彼女が抱きかかえてる赤ちゃんも加えて、3人声を揃えて言ってる声が聞こえるよ。『幸せ、ゲットだよ』ってさ——

「いやあ、大きな夢は終わんないねえ。ぐはっ」

—おしまい—